

「理想の研究環境」の実現のためにURAができること



若 者

坂 口 愛 沙*

What URA can do for the ideal research environment

Key Words : Research Administrator, Science, University-Industry Collaboration, Public Relations

1. はじめに

筆者は、高校1年生の理科の授業で「元素の周期表」に魅せられ、大学で理学部に入学し、学部3年生で研究を始めた。博士(理学)の学位取得後、アメリカや日本の大学でポスドク研究員や助教として研究・研究室運営に携わる中で、近年の科学の発展を支える多くの研究者や研究支援者に出会い、変わりつつある大学での研究環境を目の当たりにしてきた。「自分には何ができるだろうか」と考えるようになり、一年半前に一念発起して、URA (University Research Administrator) として再スタートを切った。本稿では、「理想の研究環境」の実現のためにURAができることについて考えたい。

2. 「理想の研究環境」と「社会からの期待」の狭間で

「理想の研究環境」とは、どのようなものか。大学の研究者にとって今一番必要なものは、「時間」と「お金」であろう。国からの運営費交付金が年々減少し、大学は研究を行うための十分な予算を得られなくなっている。一方で、不況の中で国の予算を使う大学での基礎研究への世間の風当たりは強まるばかりだ。追い打ちをかけるように、国の教育改革が進められ、大学は多様なカリキュラムや教育プログラム、複雑な入試システムを作り出してきた。こ

れらはすべて、大学の研究者にとって大きな負担となり、研究力の向上どころか維持さえも困難にさせている。お金があれば解決できることは多いが、お金がなくても解決できる方法を考えることも必要だ。そもそも、大学の役割とは何か、社会は大学に何を求めているのか。大学が「社会の期待」に応え、「理想の研究環境」を作り出すために今、URAが重要な役割を担っている。

3. URA (リサーチ・アドミニストレーター) とは

URAは、文部科学省によると、大学等において、研究者とともに研究活動の企画・マネジメント、研究成果活用促進を行い、研究活動の活性化や研究開発マネジメントの強化等を支える人材を指し(文部科学省URA整備事業公募情報ページより一部抜粋)、研究力強化や研究環境改善のため、活躍が期待されている。最近、少しずつ認知度が高まってきたURAだが、業務内容は多岐に渡り、雇用形態も含め、大学・研究機関によって様々である。大阪大学では、経営企画オフィスにて16名のURAが活動している(2016年12月現在)。主に、国の政策や外部資金についての動向調査・情報収集、大学の研究力分析や、外部資金獲得、広報・アウトリーチ活動、研究活動・環境の国際化のための支援などを行っている。活動内容の詳細については、当該ホームページを参照されたい(<http://www.ura.osaka-u.ac.jp/>)。

4. 大阪大学大学院理学研究科におけるURA

理学研究科では、平成27年4月に企画推進本部を設置し、専任教員としてURAを配置した。業務内容は、大学本部のURAとは異なり、主に研究科執行部をサポートしている。企画推進本部は、研究科長の下、(1)計画評価部、(2)教育企画推進部、(3)研究企画推進部、(4)国際交流部、(5)産学連携



* Aisa SAKAGUCHI

名古屋大学大学院理学研究科生命理学専攻(2007年)

現在、大阪大学大学院理学研究科
企画推進本部 助教 博士(理学)
分子生物学

TEL : 06-6850-8158

FAX : 06-6850-5288

E-mail : aisa_sakaguchi@head.sci.osaka-u.ac.jp

推進部、(6) 広報企画部、(7) リスク管理部、(8) 安全衛生管理部、(9) 共通機器管理部と、それらをサポートする企画推進事務室によって構成されている(図1)。筆者は主に、(1) 中期目標期間や年度の計画・評価のためのデータ収集・分析、(3) 分野や所属を越えた研究交流のための企画・運営、(5) 産学連携推進のための調査、(6) 研究科の広報・情報発信等に携わっている。理学研究科企画推進本部では、筆者の他に、(4) 国際交流推進を担当するURAも1名活動している。これらの業務は、2004年の法人化以降、大学に強く求められるようになったものだが、企画推進本部が設置される前は、主に教員が担当していた。そのため、URAがこれらの業務をサポートすることで、教員の教育研究に費やす時間を確保し、研究科全体を活性化するという狙いがある。



8. おわりに

URAは、国や大学から大学改革の中で重要な役割を担うことが期待されているが、研究者や事務職員と信頼関係をもって協働しなければ、力を発揮できない。大阪大学大学院理学研究科では、筆者がURA第一号であったため、まずURAの存在と役割を研究科内にアピールするところから始まった。最近、教員インタビューや様々な活動を通じて、研究者と接することも多くなった。URAとして活動する中で強く感じることは、研究者と執行部とURAの間の協力体制や信頼関係が不十分だということだ。まずは、大学関係者全員が、現在の大学が置かれている厳しい財政状況や、大学に対する社会からの期待を理解し、情報を共有し、信頼しあって

取り組んでいく必要がある。研究者が声をあげ、執行部が耳を傾け、URAと事務職員がサポートする、こういった大学全体としての協働があれば、この大学改革の波は乗り越えられるのではないか。URAとして何ができるか、今後も考え続けていきたい。

謝辞

本稿執筆の機会を与えてくださいました大阪大学大学院理学研究科の豊田 岐聡 教授、ならびに「生産と技術」の関係者の皆様に感謝申し上げます。また、大阪大学大学院理学研究科企画推進本部の活動でご指導賜りました常深 博 研究科長、篠原 厚前研究科長に深く感謝申し上げます。

